

教授の研究に依拠して」という玉稿を、わたしの古稀記念論文集『地域社会学の諸問題』へ一九七九、晃洋書房)に寄せて下さつて

いる」)。

## 村研のふるさと鳴子温泉

### 山岡栄市

昭和三十三年(一九五八)八月二十六日、わたしは有賀喜左衛門先生から速達の御手紙を頂いた。近く聞かれる鳴子温泉の村研大会で「共同体問題」について是非発表してくれ、との趣旨であった。むつかしいテーマではあり遠隔地のことでもあるのでいろいろ考えた挙句、そのころ出版した『大根島—その生態と課題』の対象地である大根島(現在の島根県八束町)にしようか、それとも調査進行中の斐川村農村(現在の島根県斐川町大字坂田)にしようかと迷つて、先生のご意見をおききする手紙を差上げたらしい。九月四日に「ヒカワヨロン、アリガ」という至急電を受取ったことが日記に書いてある。有賀先生もよほど氣を遣つて抜刷を送つて下さつたり、わたし自身も発表にそなえて現地調査に念を入れ、結局、題目を「新田地帯における村落共同体—斐川村大字坂田の植田家を中心として」ときめて事務局に報告した(余談に属するが、この植田家を中心として喜多野清一先生が「山陰農村における子方従属の一例—山岡

翌日新潟県境に近い朝日町室崎漁村を訪ねる。芭蕉の句碑も建つていた。その夜は糸魚川泊、翌日強行軍で新潟に着き午後の船で佐渡へ。初めてみる佐渡は何回も訪ねた隱岐よりもはるかに大きく、両津の宿の女中さんから「この島に高校が六つあり、女中もバスの車掌も皆高校出身、米は必要量の二倍もとれる」ときいた。三十三年段階でこのような教育普及率にびっくりしながら翌日は漁村白瀬を訪れ、國中平野を船出時間まで走つてみた。島にいる感じは全くしない。さて新潟で一泊後、水害後の阿賀の川沿岸を会津盆地に向つて走る。雨に煙つて磐梯山は見えない。夕方仙台に着いて新明先生宅を訪問し、八時半に鳴子の「農民の家」にたどり着く。硫黄の臭いが鼻をついたが、駅頭に提燈をともしてお迎え下さつたことが印象深い—それはどなたであったのかさだかに覚えていない。玄関で、福武さんや竹内さんにばつたり逢う。室は一晩とも余田さんと一緒にて喜多野清一先生が「山陰農村における子方従属の一例—山岡

翌十月七日、九時から開会。朝、有賀・喜多野・木下彰二諸先生

と挨拶を交す。わたしの発表は午後で、われながらよくできたと安心。夕方七時からの懇親会参加者は約六〇名、ドテラ姿で互いに胸襟を開いての学問論、人生論、終には余興という、村研ならでは味えない心と心との交流となり、わたしも一つおぼえの郷土民謡「関の五本松」を歌つたりした。やがて二次会ともなれば議論はますます佳境に入り、みんなよい気分になりながらの示唆をあたえられた充足感で眠りに入る所以であった。村研はよく温泉地を選んで開催されるが、温泉にひたりながら地位の上下も忘れて無礼講で話をし合えるのがなにより嬉しいことである。このことが村研への魅力を強め会員が急増した原因の一つであると思う。

九日気仙沼港調査を予定していたので、早朝四時半に起きて一番列車に乗る。車中で多分吉沢さんと一緒にいたと思う。十日には仙台から特急「はつかり」号の初運転車で上野行き。

鳴子での感激は大きかった。それは「村研のふるさと」であり、そこで三十周年記念大会が開かれようとしている。懇親会なものがある。

その後わたしは大会にはほとんど出ていない。記憶にあるのは箱根・伊良湖崎・金沢くらいで全く申訳ない次第である。欠席理由の主たることは体調である。三十八年から今日まで四回入院しているが、胃かい腸の痛みは日記によると三十年代の初め頃からあつた。村研の発表者の持ち時間が二時間近くあり、それ自体はよいことであるが、畳の上で同じ姿勢できいているときまつて胃痛がひどくなる。懇親会は楽しく有意義だがあとでひどく体調をこわし回復に苦

労する。いきおい欠席して研究通信にたよることになる。ところが研究通信がひどく読みづらい、マンネリの感も深い。「もう少しわかり易く…」と高山さんに申上げたこともある。何年だったか忘れたが「地域社会学研究会」が村研会員を主要メンバーとして新しく生れたが、あれでよかつたかどうか?。課題を各ブロックの集会におろして問題点を詰めてゆくことは非常に重要かつ効果的と思われる。感想に加えて欠席の弁をお許しを乞う。